



男は 痛い



國友万裕

第44回

『PLAN75』

1. ホモソーシャルなつながり

教え子が京都に店を出すことになった。その子は体育会の野球部だった子で、彼の友達のアメフト部だった子と一緒に店を出すというのだ。彼とは卒業後もインスタで繋がっていたのだが、つい最近までは企業の営業をしていた。この春、そこを退職して、京都でカフェバーをオープンである。

まず、オープン当初に店に行った。京都の中心地に近いところで、1階の広い場所だ。これだと家賃も相当かかるだろうと思ったものだった。「実は会社では暇だったんです。ちょうどコロナだったから、営業もzoomでしかできなくて・・・」と彼は話してくれた。暇で給料をもらえるんだったら、むしろラッキーという気もするのだが、今の子は自分の好きなことをしたいという気持ちの方が強いらしい。まだ成功するかどうかあてもないお店だが、とりあえず、自分の好きなことをしているという感触はあるみたいだった。

彼と二人で一緒に写真を撮ってインスタにあげたが、その日はそれで終わりだった。食べるものはあまりおいてない。これから広げることを考えているみたいだが、今はアイスクリームやスナックぐらいしかない。夜の営業がメインなので昼は大してお客は来ないのだそうだ。

実はその子よりも、彼と野球部の同期のある男の子と仲が良かったのだ。彼はよく喋る子でああいう子が一人いると授業がやりやすい。しかも、ただうるさいというのではなく周りを楽しくするようなことを言ってくれるので、他の学生たちも、俺と彼のやりとりが面白いと言っているくらいだった。

店を出した彼の話だと、その面白い彼は、東京で就職した後、結婚して、今は地方にいるとのことだ。野球部の連中ともそれほどやりとりはないらしい。たまに電話で話す程度だと言っていた。

2回目に行ったのはその数週間後、同じ野球部の別の元教え子からラインが来て、「一緒に行きま

しょうよ」と誘われたのだった。彼は京都在住なので、暇な時にはしょっちゅうそのお店に行っているらしい。

昼なので、またお茶だけで過ごすことになる。せっかく、その子と一緒に行くのに15分くらいで帰るのは味気ない。でも、「そんな長い時間、俺が若い人たちと時間過ごせるかね？」という、「過ごせますよ(笑)」と返事が来た。それで日曜日の昼にお店に出かけたのだった。

その日も、店は彼の友達が集う程度だった。店を出した野球部の子と誘ってくれた野球部の子、そしてアメフトの子、この時初対面だったのは同じくアメフト部だった彼の友達、そして、彼らの友達の女の子。6人だった。確かに時間はすんなり過ぎていった。自分の子供くらいの歳の子たちなのに、それほど疲れることもなく、取り止めのない話が続いた。

考えてみると俺は体育系の子とばかり繋がっている。普段やりとりする大親友の先生は別として、それ以外は一人残らず、体育系のマッショナ男たちだ。

俺は本来体育会的な性格の男だったのかもしれない。しかし、運動神経がなかったため、体育系のグループには入れなかった。そのことは俺の人生にずっと影を落としてきた。彼らと話をしながら、なんとなく寂しい気持ちが浮かんできたものだ。

彼らは今30の手前である。今の若い人の場合は、30代半ばまではモラトリアム期間。自由に自分の好きなことをしようと思っている子が多いのだそう。何度も会社や仕事を変えたりもしている。俺なんかの目から見れば、それだけ転々としたら将来にマイナスなのでは？とも思うのだが、その考え方自体が古いのだ。

俺たちの頃は、出世を念頭に置いて若い日々を過ごしていた。したがって、ずっと同じところに止まらなければ出世コースから外れる、年功序列から外れる、そういう価値観にとらわれていた。

しかし、今は違っている。ある先生の話だと、今の若者は、「生まれた時から不況。節約は当然。高

望みもしない優しい世代」なのだそうである。

それはある面いい傾向なのだろう。

俺はそんな生き方していて、子供ができたときに大学までやることができるの？と問いたくもなるが、今は共働きが当たり前。しかも、この頃はなんかかんか奨学金があつて、お金のない家庭の子でも、無理すれば、下宿して私立の大学に通うことができるらしいのである。

世の中、いい方に変わっている。そもそも大学なんて、アメリカは昔から年の入ったおじさんやおばさんもたくさん学んでいた。全体の4割くらいは25歳以上だと聞いたことがある。日本はいつまで経ってもそうならない。そういう社会が間違っているのだ。

人生100年時代。焦って生きるには長過ぎる。長距離をゆつくりと生きていくのがこれから若い子の生き方なのだろう。

2. 女は怖い！

8月のある日。

ある男性とその日は会食だった。その人は30代で、今は尊敬される仕事をなさっているのだが、かつては引きこもりだったとおっしゃっていて、俺と話が合うかと思って、俺の方が誘ったのだった。

場所は、河原町近くのイタリアンレストラン。ここはジムで知り合った人がやっているお店で前から来たいと思っていたお店だった。

「僕は今でも引きこもりなんですよ」と彼は言った。今でもそれほど積極的に誰かと付き合うタイプではないみたいだ。

俺は、彼に俺の不登校体験を話した。俺たちの頃は、不登校の走りだったから、周りがどう対応していいかわからなくて、火に油を注ぐような対応をされることもたびたびだったのだと・・・。

彼は俺より20以上若いので、さすがにそれはなかったみたいだ。

「僕は別に引きこもりが悪いとは思っていない

し、恥ずかしいこととも思ったことがないんです」と話してくれた。

彼は俺と同じで、中学くらいから引きこもっていき、高校には行かず、高校卒業認定試験を経て大学に行っている。俺たちの頃の大検である。その意味で俺と彼は一つ穴の貉だ。これまで俺の周りで大検や高卒認定試験で大学に行った人は、10年くらい前に東京に移って行った、京大卒のマッコクんと、近くのカフェでずっとバイトをしていた、立命館大学中退のお兄さん、2人だけである。

皆それぞれ俺より若い。不登校がだいぶ市民権を得てきてからの人たちなので、俺ほどひどい思いはしていない。またこの2人は不登校とは言えない。マッコクくんは今もう40代のはずだが、彼は自分から学校をやめるタイプだ。過激で行動力のある彼のことだから、こんな高校だったら俺の方がやめてやるというところだったのだろう。カフェのお兄さんももう30代の半ばのはずだが、ワイルド系で、アメリカの高校に行っていたため、帰国後、高卒認定試験を受けることになったと言っていた。

今回の彼は、正真正銘の引きこもりだが、のんびりした、マイペースタイプ。

だけど、俺の頃はそうはいかなかったんだよ。大検とか不登校とかが市民権を得ていない時代だったから、近所に出ることもできず、近所の人たちからは白眼視され続ける日々。高校の先生たちもどうやって対処していいかわからない。何よりも恐怖だったのは、不登校になって間もない頃、クラスの女の子たちが一団となって俺の家にやってきたことだった。クラスのリーダー的存在の女の子が吉永小百合タイプの子で、彼女が「みんなでいってあげようよ」と音頭をとったのだろう。

男の子たちは、他人事はどうでもいい。俺が学校に来なくても気にならない。俺は高校には3日くらいしか行っていないので、みんな俺のことを何も知らないのだ。だけど女性かというと往々にしてそういうことをしてしまうのだ。女子は連続

体をつくる。好きで連続体を作る子ばかりではないのだが、女性の場合はみんなに合わせなかったら、自分がいじめられる。もちろん、その時の彼女たちは善意である。しかし、中学の頃に女の子たちの集団的いじめにあつて、女性恐怖症に落ちいていた俺には、あれは悪夢のような恐怖だった。

あの時、お金は一円もないのに、裏口から逃げ出し、タクシーでおばあちゃんの家に向かった。怖かった。おばあちゃんがいてくれて、お金は払ってくれた。怖い、怖い、女の子の集団は怖い！あの時の動悸は今でもおぼえている。

その後、3年間地獄を這い回る日々が続いた。18の時にやっと塾に通えるようになり、そして大学に入った。大学に入ったら入ったで、英文科だから女の子ばかり。またも女の子たちの陰口や悪口に悩まされる日々だった。当時は俺のことを好きになってくれた女の子もいたが、彼女からの執拗な口説きにも恐怖を感じていた。俺は女性が怖くて、付き合える状態ではなかったのである。

「そういう図式を気にするところが、國友さんが真面目なところなんですよ」と彼からは言われた。

彼は不登校であっても、世間の常識に外れていても、男の規範に外れていても、気にしない、そういう人なのだ。

だけど、あんなだけ連続的に女の人からトラウマを負わされるとなったら女は怖いという図式は生まれてくる。

「俺はこれまで色々な大学で教えてきたけど、自分の行っていた大学ではまだ一度も教えたことないんだよ。まだトラウマなんだよ(笑)」と俺は彼に話した。

「俺としては大学の頃は必死だった。高校に行かなかったから、大学は石に齧りついてでも卒業しなくては！と思っていた。女性への偏見も無くそうと思っていた。だけど、裏目に出るようなことばかりが起きて行った。そして卒業間際になって、ゼミの先生からのアカハラ。他の大学の大学院に入ってから少し上向きになっていったけど、

大学まではどん底だったんだよ。」

本当に大学の頃は、なぜここまで悪いことが続くのかと思うくらいだった。正確には小学校の高学年くらいから俺の人生は次々に試練とトラブルに巻き込まれて行ったのだった。人間の人生はドラマだ。不運が続く時期は本当にあるのだ。当時、幸運の神様は俺に完全に背を向けていた。

そして、俺の不運にはいつだってジェンダーと女性が絡むのだ。

彼と食事をする数日前、思いもかけないトラブルが起きた。Facebook で繋がっていたある女性から突然、友達を切られたのだ。俺がコメントした内容が、彼女のツボを刺激してしまったみたいだった。彼女はその前日まで、いいね！をたくさん入れてくれる人だったので、あまりのあっけない友達解除に俺はショックを受けた。

どこがどうまずかったのか？自分でもわからない。そのことを行きつけのカフェの女性に話すと、「たまたまその時の機嫌が悪かったんじゃないの」と言われた。そうなのだろう。それほど深い意味があったわけではなくて、成り行きで解除されてしまったのだ。深く取ることはないか。

Amazon で見てみると、姫野友美の『女はなぜ突然怒り出すのか?』など、女はそういうものだというようなタイトルの本は何冊も出ている。それが女の本質なのだとか割り切らなきゃいけないんだろうけど、俺は過去のトラウマがあるから割り切ることができない。女性への恐怖がますます増幅されていく。

俺の女性嫌いは固着している。もう 60 だし、このまま生きるしかないのだろうが、今でも俺はそういう自分を不完全に感じているのだった。

3. 孤独なお盆

8月13日、お盆モードになった。周りは13日から16日までが連休という人が多く、インスタグラムを見ていると、一気に旅行の写真が増えた。

実は今年の夏休みは元教え子たちに遊んでもら

うことを期待していた。実際、9年くらい前に教えていた男の子は、また一緒にプールに行くことを承諾してくれていた。彼とプールに行ったのもう6年くらい前だ。彼は水泳部で、真面目ないい子なので、俺のような先生にも殊勝につきあってくれるのだった。

ところが、13日になっても彼からは連絡が来ない。彼は結婚間近の彼女もいると聞いているので、おそらく彼女とのデートに忙しいのかもしれない。

また福井県に住む先生のところにも遊びに行きたいと思っていた。その先生には長年お世話になってきたのだが、定年退職なさって今は75歳のはずだ。しかし、まだ元気で、京都に来られた時には会っていた。

福井は10年以上前に一度行ったことがあって、その時にソースカツ丼を食べ損ったのがものすごい心残り。1度食べてみたいと思っていたのだ。

その先生にもラインしたのだが、それほどいい返事が返ってこない。どうやらあまり乗り気ではないみたいだ。もう75歳だし、ゆっくりしたいのかもしれない。あるいは夏休みで、孫がたくさんいるから孫の世話で忙しいのか。とりあえず、あまりしつこくいうのは不愉快だろうと思ったので、連絡しないことに決めた。

そのほかにもインスタでつながっているかつての教え子はたくさんいる。「また、会いたい。会いに来てください」と俺が誘えば、「是非是非、また会いたいです」と返事が来るのだが、結局、言うだけで、皆来ないのだ。皆社会人になってしまっているし、お盆休みは里帰りや小旅行などで過ごしているのだろう。またそのうち気が向いたらつきあってくれるだろうから、あまりしつこく言わないほうがいい。

友達俺の人生にやってきては去っていく。人生、そんなものなのだ。

俺の方も、この頃はたくさん友達がすぎるのはしんどいという気持ちにもなっている。俺は元々が引きこもりだったため、その分の余白を埋めようと、40代くらいの頃は交際範囲を大きく広

げたが、60 近くになってくると人付き合いも程々にしなければ、体力がもたなくなってくるのである。映画も昔だったら毎日のように見に行っていたが、今は毎日だと体力がもたない。昔だったらどれだけ仕事が忙しくてもレイトショーに行っていたが、もうレイトショーなんて久しく行っていない。次の日の仕事に差し支えると思ってしまったのだった。

このところ年のことばかり考える。もうすぐ 60 だ。顔を見ても白髪が増えて、おじいさん顔になってきたと我ながら思う。今は人生 100 年時代だけれど、60 代ぐらいになってくると徐々に死ぬ人も出てくる。ガンなどの病気にもなりやすくなる。俺の人生いつまであるのか。

このところ残尿感がある。トイレに頻繁に行きたくなる。でも行っても出ない。そういう状況が続いている。これはおそらく老化なのだろう。

8 月になって、ミニドッグにも入った。まだ結果は出ていないのだが、なんと身長が 1 センチ縮んでしまった。もちろん、その時の髪の毛の状態や姿勢で 1 センチくらいは前後するだろうから、そこまで真剣に考えることはないのかもしれないが、ショックだった。

俺が 10 年ほど前までやりとりのあった男性運動系の男性は俺より 10 歳年上だが、最近になって癌と診断されて、すぐに亡くなるとうことはないうにしても、すでに転移しているらしくて危ない状態らしい。あれだけ健康自慢で健康第一の生活をしてきた人なのに、人間癌になるときはなるのだ。

それにしてもこの人は変わっていない。俺がこの人と決裂して、もう 10 年以上経つが、彼のブログを呼んでいると考え方は全く変わっていない。どれだけ痛い目にあっても、人間は変わらないのだなあ感慨すら覚える。

先日、電車の駅で誰かが大きな声で喧嘩していて、フッと見たら、8 年ほど前に喧嘩別れした女性だった。彼女も年齢的には俺より 10 歳くらい上で、これまでも様々なところでトラブルしてきた人

だが、やはり変わっていない。

このお二人と限ったものではない。あの当時出会って、決裂した人たちは、ほとんどその後も同じ人生を繰り返している。同じ歌を歌い続けている。人間、基本は変わらないというのは本当である。

俺だって変わっていない。変わりたいと思いつつ、変えられない部分は、宿命なのだろう。そう考えるしかないのだ。

4. 「死」が近づいてくる。

歳をとるにつれて、何よりも「死」を身近に感じるようになってきている。

俺のおじさんたちは一人残らず亡くなった。おばさんたちはまだ生きてはいるが、だいぶ頭がボケてきている。母は元気だが、母もいつまで元気でいれるかわからない。もう 84 歳なのだ。

これから一人ずつ、身近な親戚や友人が亡くなっていくだろう。先日もお世話になった先生が 79 歳で亡くなったと聞いた。今は 80 歳前に死ぬと若いと思ってしまう。昔は、平均寿命は 70 ぐらいだったのに。

俺の知り合いの先生は、人生 100 年と言うのは政府が年金給付を遅らせるためのプロパガンダだと言う人もいる。けれど、俺の周りは確実に 90 以上まで生きる人が増えている。おばさんたちは皆 80 歳過ぎているし、先日亡くなったおじさんも 90 過ぎていた。

俺はいつまで生きるのか。

この頃、つくづく体力や気力が衰えてきたとは感じる。40 代の頃までは仕事をこなした上に、学会や勉強会に出かけ、スポーツクラブにも通っていた。映画も今よりたくさん観ていた。ところが今は、ボクシングジムに週 1 回通うのがやっとだ。映画も、この頃は配信で見ることが多いせいもあって、途中で見るのをやめてしまう。

まだ仕事を減らすわけには行かないし、仕事を減らしたら、余計にしんどくなるだろう。俺は暇

をつぶす、ぼーっとする、遊ぶということができない状態になってしまっている。いつだって、家に帰ると頭は冴えているのだが、何をしたいのかわからない。スポーツクラブに行くのもしんどい。映画に行くのもしんどい。早くに寝てしまう。しかし、寝るとすぐ目が覚める。これも年のせい、たくさん寝なくても大丈夫な体の状態になってしまっている。

一方で、起きているのもしんどいのだ。もっと頭を遊ばせる習慣をつけなくてはならないのだ。自分で言うのもなんだけど、俺は30代くらいからフル回転で頑張ってきたので、遊べなくなってしまっているのだ。

それが疲労の原因になってしまっている。

先日、久しぶりにオイルマッサージを受けた。俺のところに毎週きてくれるマッサージの人がお盆休みで、どうしてもマッサージを受けたくなくて、久々に昔行っていたところへ行ってみた。

そこは10年以上前からたまに行っていたところでそうそう通い詰めていたわけではない。だけど、そのお店の女性は俺のことを本当によく覚えてくれていて、昔に比べると痩せましたねと言ってくれた。あの当時の俺、何キロくらいだっただろうか。俺は痩せている時と太っている時でアップダウンがあるので、いつだったのか思い出せない。

ここのお店の特徴は、至れりつくせり、丁寧にやってくれるところである。きめ細やかなマッサージというところなのだろう。

ここは従業員の方は女性ばかりだが、こういうのを女性的というのだろうか。最初にお茶を出してくれて、終わるとお茶とちょっとした和菓子が出る。オイルマッサージの時はオイルがつかないために使い捨ての紙ショーツを用意してくれている。

男の人がやっているところのような荒削りな味わいではないのだ。

ただ、俺は、女性的・男性的という言い方は極力避けたいと思っている。それを言ってしまうと、

かつての俺のように辛くなる人がでてくるからだ。男という枠にハマらない人・女という枠にハマらない人には、これくらい嫌な言い方はないのだ。

『キレル女 懲りない男』という本をマーケットプレイスで買った。なかなか面白い考察があるなあと思いつつ、ページをめくっていた。

ところがだ。本の途中のところで、レディファーストを肯定するような一節があって、そこで俺はキレてしまい、読むのをやめてしまった。

彼女がいうには、男性は機械的にしているだけのことであっても、レディファーストをしてもらえると女性はとても嬉しい、男女平等の名の下に廃れさせるには惜しい習慣であるとのことである。

しかし、この考えは明らかに彼女のご都合主義だ。それをいうんだったら、男だって女の人に気を遣ってもらえれば嬉しいことはたくさんある。ところが、それを大っぴらに言ってしまうと、「女性差別だ」とフェミニストたちからお叱りを受ける。

俺の知り合いの女性はフェミニスト的な女性で、SNSに多少でも女性差別を匂わせるようなことを書くと厳しいコメントを入れて、正そうとしてくる。その一方で、自分は平気で男を批判するようなことを書くのだから、腹が立ってくるのだが、炎上になるのが怖いから、俺の方は何も言わない。

世の中は、まだまだ「男性差別」を理解していない。レディファーストは、「女性の方が弱き性」であるという考えが前提にある。女性よりも強い男性はいいだろうが、女性よりも弱く、スポーツもできず、能力のない男性からしてみれば、プレッシャーとなる。自己価値を落とすことになる。

俺は弱い男であるが故に馬鹿にされ、踏み付けにされた少年時代を送った。それで心が壊れて、今でもその後遺症に苦しんでいる。俺はまだ男になった気持ちではないのだった。

あー、また昔と同じことの繰り返しを書いている。また、昔のトラウマが蘇ってきた。俺はこの問題に目覚めるのが早過ぎた。いつまでたっても社会は俺の考えを理解してくれない。も

ういい加減、諦めざるを得ないことなのだけど。

痛恨の思いを抱えたまま、俺は一生を終えるのだろうか？

5. 『PLAN 75』（早川知恵監督・2022）

先日、安いからと思って手相を見てもらったら、65歳くらいでちょっと体調に危険が訪れるかもと言われた。それを乗り越えれば長生きできるそう。ちょっとギクッときた。俺は親父が65歳で亡くなっているのだが、65歳で死ぬのは今の世の中ではあまりにも早い。しかし、安倍さんもお父さんと同じ歳で死んだし、竹内結子さんもお母さんと同じ歳で死んだ。俺もひょっとして、65歳で死ぬ運命なのだろうか。そうするとあと7年しかない。さあ、どうしよう??? 友人にそれを話すと「占いなんて真剣に気にしなくても」と言われた。確かにそうなのだろうが、俺は気になる性格なのだ。

俺の母は60過ぎてから始めた仕事もうまく行って、世界中を回った。70代くらいまではバリバリに仕事していたが、80過ぎてからは流石に仕事を減らして、今は長年乗っていた車も廃車し、弟の料理をつくるのを生きがいにしている。弟と二人暮らしなのだ。若い頃は苦勞の多い人だったが、幸せな晩年である。今でも友達がたくさんいて寂しいお婆さんではないのだ。

俺は死ぬ時はアメリカで死にたいという気持ちもある。俺の人生はアメリカ、アメリカだったのだ。それを母に話すと、アメリカで死んだりしたら、誰もお墓参りしてくれなくなる。「私がある程度のお金は残すから、それで年に1回くらいアメリカに旅行すればいいじゃないの」と言われた。母は俺の老後や死んだ後のことも考えてくれているのだ。俺はどっちみち、日本で死んでも、お墓参りに来てくれる人なんていない。そんな人が欲しいとも思わない。俺は今洗礼に向けて勉強中だ。洗礼は天国へのパスポートと言われる。洗礼を受けて、神様のもとへとやすらかに旅立つのだ。

『プラン 75』は、75歳を過ぎれば、自分の生死を決められるという発想を前提にしたドラマである。前回の連載にも書いたが、健康年齢は72歳くらいだと聞いているので、75くらいで死ぬのが一番理想的なのかもしれない。

何よりもこの映画で身につまされたのは、倍賞千恵子扮する老女が若い女の子に遊んでもらおうとする場面である。オレオレ詐欺が問題になっているが、歳をとると若い子に遊んでもらえるのは本当に嬉しい。つい甘い言葉にのせられてしまう。

俺もこの原稿を書きながら、誰かかつての教え子が連絡してこないかなあと心のどこかで願っている。彼らとたまに会って食事をするのが、今の俺の最高の幸せの瞬間なのだ。

だけど彼らからしてみれば、俺なんか単なる爺さん。気が向けば遊んでくれるけど、積極的に遊ぼうとは思わないだろう。まして、今はお盆だ。里帰りもあるし、友達とのバカンスを楽しんでもいい。誰が俺なんかとつきあおうとするだろうか？

これから10年、20年経てば、ますます歳をとり、構ってくれる若い子は減っていく。

これからの老後を考えなくてはならない。とりあえず、75歳までは若々しい人もいるから、それを目指しましょう。75で死ぬのではなく、75まではせめて若く！それが俺にとってのプラン 75である。